



元気に暮らせる「高齢者コミュニティ」

一般財団法人日本老人福祉財団 青木雅人理事長

ここ数年、介護業界全

体では「自立支援」、施設業界では「虐待防止」など、介護保険制度の根本が問われるような課題が次から次へと浮かび上がり、報酬改定の際の議題として取り上げられている。

一般財団法人日本老人福祉財団(青木雅人理事長)は昭和48年に設立して以来、高齢者向け施設の「老舗」として今年45周年を迎えた。そして介護業界が様々な問題に直面している中でも、「その根底は設立以来変わっていないし、設立趣旨は変えるつもりもない」(青木

理事長)という。

現在でも守り続け、継続している同財団の「根底」とは何か——青木理事長に聞いた。

——そもそも財団設立の趣旨は何であったのか?

まず、当財団の有料老人ホーム「ゆうゆうの里」は財団設立以来、「高齢者コミュニティ」を実現することを目指してきた。

日本は高度経済成長を経て経済的に豊かになり、同様に高齢者も豊かになり自立できるようになってきた。

一方で「自然との共生」や「豊かな生活を望む

声は次第に高まり、社会全体で「コミュニティ活動」に取り組み動きは始まっていた。

また、大家族制度が中心の社会から高齢者の独居が当たり前になる等、社会モデルの変化もあった。

このような時代の流れの中で、当財団の創立に

関わられた皆さんは先見の明を持ち「高齢者の生きがいとは何か、豊かな

老後とは何か」を実現するために「ゆうゆうの里」設立に取り組まれた。この精神は、現在も全く変わっていない。

わっていない。



——一方で時代の流れとともに変化したものはないか?

やはり介護保険制度の開始だ。

様々な仕組みが新たに登場してくる中で、当施設は他どのような差別化をしていくか、模索してきた。

そして私たちは「元氣な時から最期まで」という「終の棲家」を実現するためには何が必要かを正面から捉え、三つの柱を打ち出した。

一つは、自分の生きがいを実現するという「自己実現」。二つ目は仲間や

社会との「交流」。三つ目は介護・医療を「一体的で切れ目なく提供」していくこと。この三つを柱に「高齢者コミュニティ」を実現していくことが、現在も取り組んでいる。

——具体的には?

元氣な方が「自分たちで仕掛けをつくる」仕組みを、われわれ施設側が意図的に投げかけている。例えば、施設の中に「入居者委員会」という、入居者の自治組織をつくっている。

——そのような取り組みでどのような効果が...?

現在、入居時の平均年齢は約76歳だが、当財団の最初の施設である浜松「ゆうゆうの里」ができた頃は69歳だった。

平均年齢は確かに年々上がってきているが、体

力とか精神は「当時」の方々と全く変わらない。実際に、浜松の施設では42年間入居しておられる方がいらっしゃる。百歳以上の方も28名おられる。平均の入居年数も15〜16年だ。

——その「秘訣」は...?

皆様が当施設に入居されて精神的に安らかになられたことではないかと考えている。

私は平成10年から湯河原の施設長を務めたが、こんな実話がある。

私の在任中にあるご夫婦が入居されてこられたが、旦那様は心臓病で余命「2〜3年」と医師に宣告され、奥様のことを考え、湯河原の施設に一緒に入居された。その後、旦那様の病状が良くなり、医師が「奇跡だ」と驚い

た事例が、本当にある。精神が、いかに肉体に影響を及ぼすかの二つの事例といえると思う。そもそもご本人が、病状の回復にびっくりしておられた。

ご夫婦は「安心感」を手に入れられ、ご自分たちのやりたいことを追求されたからではないかと、私は考えている。

【略歴】青木雅人(あおき・まさと) 1953年3月12日生まれ。1976年4月重症成人障害者施設「和泉園」勤務。

1983年11月財団法人日本老人福祉財団勤務、1998年4月同財団・湯河原(ゆうゆうの里)施設長就任、2000年4月同財団理事、2013年10月同財団理事長就任、現在に至る。